

やり投げの修正指導における動感発生に関する運動学的様相化分析

増田 哲朗（宮城教育大学大学院教育学研究科保健体育専修）

I. 目的

やり投げ、客観的態度を持つ自然科学的研究の手法が多く取扱われている。本研究ではやり投げ専門とする学習者の運動の習得過程を学習者の主観的な「動感」を対象に、発生論的運動学の立場より明らかにすることを目的とする。

II. 方法

実践指導を行い、学習者の主観的な動く感じである「動感」(金子, 2005)を対象に、運動習得の過程における様相変動を捉える運動学的様相化分析(金子, 2015)を用いて行う。運動の習得過程における様相変動「否定」、「疑念」「可能性」の様相変動を捉えることで、学習者本人が「できる」といった「確信」の様相を得る過程を明らかにすることができる。

本研究では、自身の野球を経験してきたことからやり投げを選択し取り組んできた学習者(以下、C)を対象とし修正指導を行なった。

期間は8月29日から10月29日までの期間に全16回行った。途中テスト期間に入るため2週間指導を行えない期間があり、終了後また再開した。

III. 結果・考察

テスト前の指導では、Cの投げ出すヤリの飛行姿勢、クロスステップの姿勢、振り切りの修正が行った。投動作について「片足投げ」を行いリリース位置が前になってしまいヤリをまっすぐ投げられないCの癖を解消した。

「残し」について「やりたいけどできない」といった「疑念」の様相を示したCに「チューブ引き」を処方し、「残し」と「投げ上げ」の動感を掴ませた。その結果、「肩甲骨に引っ掛ける」や「胸を張るくらい」といったコツを掴み、やり投げにおいて「振り切ってヤリをまっすぐ投げることができる」とい

った確信を得ることができた。

テスト期間明けでは、自身より競技レベルが高い選手の動画を参考に練習に取り組んでおり、「肩を残すようにして投げる」といったそれまでの動感の表現とは違っていた。指導を行いながらCと会話をし、なんとか以前の感覚を掴み直すことができた。その際「右足で押し込む」といった新たなコツが現れ、ヤリの飛行姿勢も安定していた。

しかし、Cの学校生活における怪我によりこれらのコツが機能しなくなってしまい「投げられない」といった「否定」の様相を見せた。怪我の回復後、「ヤリをまっすぐ投げ出す」といった感覚を掴みなおせたが、「振り切りで力が抜ける」といった報告を受け、最終的に「疑念」の様相のまま指導期間が終了した。

IV. 結論

「残し」の動感について学習者は、多様な様相変動が起きており「やりたくてもできない」という状況にあった。このことから「残し」の習得が、野球経験者が「ヤリをまっすぐ投げることができる」といった確信を得るためのコツを掴むのに重要な指導法であると言える。また、学習者自身の運動観察やコツを掴んだ状況を考慮せねば、コツが消滅してしまい、「否定」の様相から抜け出すのは難しいと考えられる。

〈文献〉

金子明友(2005) 身体知の形成(上) 明和出版

金子明友(2015) 運動感覚の深層 明和出版